

A 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっていきます。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1と3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

- マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。
- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
 - 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
 - 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

二〇〇八年にノーベル文学賞を受賞し、すでに世界的な小説家・詩人として知られているル・クレジオが、近年(二〇〇四年、邦訳は二〇〇六年)、『アフリカのひと』という回想記的な小説を上梓した。^(a)ル・クレジオ自身はフランス、ニースの生まれであるが、そのルーツはいささか複雑である。邦訳の副題に「父の肖像」とあるので、彼の父ラウル・ル・クレジオがアフリカ人ということなのだろうか？ いや、そうではなく父の国籍はイギリスなのであるが、しかしその祖先はアフリカ東南のモーリシャス島に移住したケルト系フランス人、しかもモーリシャス島は、初めフランスの植民地でその後イギリス領となり、そして第二次大戦後、モーリシャス島が独立したとき、それにともない父はイギリス国籍を剥奪され最終的にフランスへ帰属する、というまさに^(注1)ディアスポラ的な存在である。この父ラウルは、第二次大戦中、イギリス政府から単身派遣された医師としてギアナ、カメルーン、ナイジェリアに赴任し、現地で過酷な医療活動と生活を強いられるが、そのときの痛切な体験がのちに家族に語られることはほとんどなかったようだ。

第二次大戦終結後、八歳のル・クレジオは父の働くナイジェリアに母、兄とともに移り、そこで一年あまりを暮らす。このときの鮮烈な体験が、『アフリカのひと』⁽⁴⁾には⁽¹⁾ノウミツに反映されているわけだが、作者ル・クレジオの眼差しは、自己の体験についてよりも、もっぱら父ラウルと一族のルーツに注がれている。

さて、筆者が非常に興味深く思うのは、西洋言語を使う⁽¹⁾アフリカの若手作家たちが、ル・クレジオとは異なり、「西洋」への帰属以後、その多くが故郷アフリカといま居る西洋文明社会との中間地点に立ち、どちらの側にも疎外感をおぼえるディアスポラ的な感性で小説を書いているということだ。いかにもマージナルにして^(注2)ポストモダンニッシュな〈宙吊りの自己〉〈浮遊する自己〉を彼らは描き出している。だが、そのような傾向の彼らに比べ、ル・クレジオは(彼自身もディアスポラ的存在なのであるが)、⁽²⁾彷徨する自己の位相を、老熟の果てに培われた彼の倫理的な眼差しに拠りつつ、もう一度、世界のなかのどこかある一点の現実の場に釘付けしようとするのである。

たとえば「アフリカのひと」では、作者は自分が誕生する以前の、父祖の代から連綿とつづく「生」そのものから賦与された遺産——それは彼に歴史性と中心性とを与え、彼を起源へとみちびく薄明の記憶である——を文学表現のなかを探し求め、自らのアイデンティティの回復を、そこに狂おしいまでに企図しようとする。アフリカの大地を踏みしめていた一年あまりの「時間」において、「なにかが私にあたえられ、なにかが取りもどされた」と彼に強く感じさせたその名状しがたい を、彼は自「己」の「生」内部にするとく探知しようとするのである。

アフリカ人たちが言い慣わしているところによれば、人間は母の胎内から出てくる日からではなくして、孕まれた場所と瞬間から生まれてくるのだという。私はといえば、私の誕生についてなにも知らない（誰しもそうであろう、と私は推測する）。しかし私自身のなかへ入りこむと、わが眼を内部へ向け直すと、それは私が知覚できる力であり、エネルギーの沸きたちであり、集まってひとつの身体を作ろうと準備している分子群のスープである。そして（内部に見えるのは）懐妊の瞬間の前でさえあり、懐妊に先立つたものすべて、アフリカについての記憶のなかにあるものすべてなのだ。散乱した、観念的な記憶ではない。高原地帯のイメージ、村々のイメージ、老人たちの顔、アメーバ赤痢にオカされた子供たちの大きくなった眼、こうした身体すべてとの接触、人間の肌の匂い、愁訴のささやき。それらすべてにもかかわらず、それらすべてのせいで、こうしたイメージは幸福の、この私を出生させた充溢の、イメージなのだ。^(b)

（「アフリカのひと」菅野昭正訳）

母の胎内から産み落とされた瞬間が「誕生」なのではない。母と父とがむつみあい、すべての記憶がノウミツに攪拌し、彼らと彼らを囲むものからそがれ、待ち望み、その場において受け継がれた一瞬こそが「誕生」であるとする思想は、「人間」を連続性の存在として真摯に捉えようとするものである。もしもそうした考えに準ずるならば、われわれ「人間」は偶然の海に船出する孤独なモナド^(注3)ではなく、「誕生」以前の記憶を受け継ぎ、

またせひとも受け継がねばならぬ者たちだ。

ル・クレジオは、八〇年代以後「フランス語圏作家」に分類されることもあったが、近年の仕事内容から鑑みれば、あるいは「³⁾アフリカ文学圏作家」に位置づけることも可能かも知れない。彼は、民族母語で書く（古い世代の）アフリカ作家たちのように西洋言語を拒絶したりレキレキを持たないが、西洋言語で書くことへの違和は、すでに物心がついたころから彼の内部に確実に萌もしていたはずである。彼もいう。「フランス語で書くことは私にとって美的な選択以上のことを意味しており、むしろ、イギリスの支配に抗してモーリシャス島の旧支配者層の側に立つことを意味していました」と。英語も得意であった彼にとつて、フランス語で小説を書くということは決して自明の行いではなく、そこにはつねに政治的な力学や共同体における文化、民族、記憶と歴史の問題が反映していた。つまり彼の作家人生においては、じつは使用する言語と自己存在との間に安定した統合感（一体感）が得られることはほとんどなかった——ちょうど在日外国人作家のように——ということだ。ただ彼は、アフリカの若手作家たちとは異なり、その違和感（疎外）がもたらす不安の解決を、彼自身の中心——さらなる彼の内部——に向かつて探し求めようとした。それはあてどない、しかしどこまでも活力に充ち、そして厳しく倫理的で、痛切な具体化への意志をともなう始原への羈旅きりょであった。「アフリカのひと」は、次のような記述から始まっている。

どんな人間存在もすべてひとりの父親とひとりの母親による結果である。彼らを認めない、彼らを愛さないということはあつても、彼らを疑うわけにはいかない。とにかく彼らはいるし、彼らの顔、態度、物腰、癖、幻想、希望があり、彼らの手の形と足の指の形、眼の色と髪の色、ものの言いかた、考え、おそらくは死のときの年齢があり、それらすべてが私たちのなかに受けつがれているのである。私は長いこと母が黒人であればいいのにと望んでいた。物語をひとつ、過去をひとつ自分で拵こしらえて、私がアフリカから、誰ひとり知るひともなく、他所者よそものになつてしまったこの国へ、この町（ニース）へ帰つてきたという現実を逃れようとし

たのだった。ついで父が退職の年齢になって、フランスへもどってきて私たちと一緒に暮らすようになったとき、父のほうがアフリカ人なのだとすることを私は発見した。それは承服しにくいことだった。私は後もどりし、やり直し、理解しようと試みなければならなかった。

（『アフリカのひとつ』括弧内引用者）

アイデンティティあるいは中心への志向を、すぐさまナショナリズムや民族主義、原理主義などからめて断罪的に批判したがる人たちがいるが、それはまったく迂闊な（うかつ）ことというほかない。思うに、二十世紀を席捲した「脱構築」や「周縁」の思想は、かえって「人間」への理解を即物的でフラットなものに後退させ、愛・罪・倫理についての概念をじつに底浅い事象に変じさせてしまった。実際、ル・クレジオもいうようにわれわれ人間を相対化し解放する「他なるもの」は遠い彼方にあるのではない。「それはすぐそばにある」目で見て簡単にわかるすぐ近くの場所にある」のだ。自らの〈生〉の具体をたどり、始原に遡ること、薄明の記憶を追い求めたル・クレジオは、決してノスタルジックな夢の世界への回帰を望んでいたわけではない。彼が取り戻そうと試みていたのは、〈生〉の途上で見失いかけていた過去という「いまならざる時」とこの現在とを結ぶ⁽⁴⁾記憶の紐帯であり、また、それを可能にする倫理的にして実存の痛みをとまなう彼の眼差しなのである。

（原仁司「中心の探究—言語をめぐる「愛」と「罪」より」）

（注）

1 ディアスポラ——ギリシャ語で、本来は、バビロン捕囚後のユダヤ人の離散、あるいは離散したユダヤ人のこと。ひいては一般的に祖国からの離散や離散した人を指す。

2 ポストモダンニッシュな——「ポストモダン風」の。ポストモダンとは、合理性を尊ぶ近代主義を超えようと一九七〇年代後半以降に興った思潮で、多元的な文化や知を目指している。

3 モナド——哲学术語で、これ以上分割できない最小単位のこと。

問

- (A) 線部(イ)の漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)
- (B) 線部(a)と(c)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。
- (C) 線部(1)について。アフリカの若手作家たちについての説明文のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 故郷を活動の地としながら、西洋言語を使用して作家活動を行っている。
- ロ 西洋言語を拒否し、民族語で書くことを通じて植民地主義からの脱却を試みている。
- ハ 彼らが疎外感を覚えるのは、故郷アフリカとも身を置いている西洋文明社会とも一体感を持ちえないからである。
- ニ 自らの内奥を探求することで、失われた記憶とアイデンティティを回復しようと試みている。
- ホ 彼らの作品には、西洋の現代思想を援用しつつ、人間を即物的に描くものもあった。
- (D) 空欄□にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当なものを本文中から抜き出し、五字で記せ。
- (E) 線部(2)について。「彷徨する自己」の趣旨に合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 複数の文化のいずれにも属していない状態
- ロ 自分の内部に目を向け直している状態
- ハ 一族のルーツを見失った状態
- ニ 父祖の記憶を受け継ぐという自己意識
- ホ 民族主義を断罪する意識
- (F) 線部(3)について。ル・クレジオが「アフリカ文学圏作家」にも位置づけられると筆者が考える理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で記せ。

- 1 幼少時に、家族とともにアフリカに滞在した記憶が重要視されているから。
- 2 西洋言語で書くことに違和を感じつつ、あえてフランス語を選択しているから。
- 3 国籍がたびたび変わった父親をアフリカ人と認識していたことが創作の原点となっているから。
- 4 人間を連続性を有する存在と捉えることで抜き難い疎外感を克服しようとしているから。
- 5 フランスに他所者として帰国したことを耐えがたく感じているから。

(G) 線部(4)について。ル・クレジオにとつての記憶の説明として内容が合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 記憶とは、自己の体験を主体とするものである。
- ロ 記憶とは、過去を回復し、自己に中心性を与えるものである。
- ハ 記憶とは、自己の疎外を対象化することを可能とする抽象的な観念である。
- ニ 記憶とは、多文化的な自己の相対化を可能とするものである。
- ホ 記憶とは、自己の内面にあつて人間を真に理解するための具体的なものである。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

自由というものは、ただそれだけを取り出してみる限りでは強制の欠如した状態を意味している。よほどの屈理屈をこねるのでなければ、あらゆる自由概念は多少なりとも強制からの自由を内に含んでいるとみなすことができるだろう。だが、このような自由がいかにして可能となるかを問おうとすれば、人は [a] な視点を離れて

[b] なそれへと視座を転換しなければならぬ。「積極的自由」論は、いわば一つの [c] な自由論とも言えるものであった。(注1) カントは、内なる道徳法則に従うとき、そのとき人間は自由の状態にあると考えた。ヘーゲル(注2) はそれを外なる方向に展開せしめて、人は外なる国家社会の中でこそ自由を得るという見解を示した。ハーリン(注3)

の自由論に述べられているように、国家を自由の保証人とするようになった積極的自由はやがて個人の自由と衝突するに至る。このような帰結は認めておかなければならないが、自由論としてみると、ルソーやヘーゲルやマルクスらの自由論は個人の自由が可能になる条件を問うところの [d] 自由論であったと言えるだろう。(注4)

同じことは「消極的自由」論についても言える。消極的自由は確かに強制からの自由を自由論の核にもつが、それは「自由を、もつと自由を」と叫ぶ政治的スローガンではなかった。消極的自由論もやはり強制からの自由が可能となる諸条件を主要な問題としていたのである。(注5)

人は強制から自由になるべきだとしても、そうなるためにはどのような条件や制限が必要とされるか。そのような条件や制限は人々の自由を抑圧するのではなく、かえって自由を助長するのはなぜか。こうした類の問いをこの自由論はつねに問い続けてきた。そしてそのような条件や制限を一つ一つ吟味し、配剤して組み立てられたのが自由主義であった。

(注6) 自由主義は政治的権威と個人の自律性の間の関係はどうあるべきかという問題に対する解答として現れた、とハロウエルは言っている。この問題は天から降り地から湧き出たものではない。それは歴史の具体的な文脈の中で生じたのである。絶対王政と興隆する市民階級との軋轢あつれきが、あるいは国家と宗教の対立が、自由の問題を表

面化させ先鋭化させた。そうした中で恣意的な権力からの自由というものが政治の舞台に上ったのである。

個人は国家といえども侵入することを許されない「自分だけの部屋」をもつ、と人々は主張した。だが個人から成る社会は「自分だけの部屋」が集まったアパートメントではない。ある種の権威は社会が秩序をもつにはどうしても欠かすことはできない。それではいったい、権威と個人の自律をどのようにして調和させるか。この問題に対して自由主義は、「個人は非個人的、客観的かつ永遠の権威にのみ服従」(ハロウエル)することに、よって調和は可能になると考えた。このような自由主義をハロウエルは「統合的自由主義」(integral liberalism)と呼んだ。個人的自律性と超個人的原理が結び合わされた自由主義であることを強調するためである。

自由は一つの体系を成している。消極的自由の主張者は恣意的な権力の介入を許さない自分だけの部屋、個人の私的領域、あるいは個人の自律性、を主張するが、それらをそのままの形で主張するのではない。こんどは問いを自らに向け、私的自由が可能になる条件を問う。そしてそのような条件をもとにして自由の体系を構成するのである。

体系化されない自由は大なる可能性でアナキーの自由に陥ってしまうだろう。そのみか自由論までがアナキーの状態に陥ってしまうに違いない。自由を拘束する障害や負担を一つ一つ数え上げ、政治的自由、経済的自由、言論・出版の自由、学問の自由、信教の自由というふうに、自由は多様化し拡散してしまうであろう。

理論として、あるいは体系として自由を論じる自由論は決して空 ① 空 ② の自由論ではない。自由をめ

ぐる諸問題が社会の中で発生するとしたら、自由を可能にする諸条件も社会の中に潜んでいるに違いない。だとすれば、自由の理論、自由の体系は、社会の理論や社会の体系という形をとるはずである。自由論者ロック、自由論者スミス(注6)は、当然、社会の理論家でもあったのだ。彼らの社会理論の中には、従って自由論の中には、神や正義や個人の良心といった目にはしかとは見えぬ要素が理論の重要な構成要素を形作っていた。「神の見えざる手」は大それた比喩などでは決してなかつたのであって、それは市場社会の中の超個人的原理を遠回しに表現したものであった。

自由は強制の欠如という一点で特徴づけられるのではなく、一つの体系をなしている。ということとはとりもなおさず、自由が崩壊の可能性をもつということでもある。安定した力学的構造をもっているのならともかく、自由は目に見えない諸観念をいくつも含んだ精妙きわまりない体系であつたから、それだけに崩壊の可能性も高かつた。

自由の体系は決して安定的な体系ではない。むしろ著しく不安定であるとさえ言えるだろう。その不安定性は外力に弱いための不安定性ではなく、むしろ体系の抽象的性格のゆえにもつ不安定性であるように思われる。自由やそれによつて生ずる諸観念は意味の変容を蒙りやすく、その結果、自由の体系はもとの体系とは似ても似つかぬものに変化してしまうのである。

(間宮陽介「ケインズとハイエク」による)

(注) 1 カント——ドイツの哲学者(一七二四—一八〇四)。

2 ヘーゲル——ドイツの哲学者(一七七〇—一八三二)。

3 バーリン——イギリスの政治学者(一九〇九—一九九七)。

4 ルソー——フランスの哲学者(一七一二—一七七八)。

5 マルクス——ドイツの経済学者(一八一八—一八八三)。

6 ハロウエル——アメリカの政治学者(一九一四—一九九一)。

7 ロック——イギリスの哲学者(一六三二—一七〇四)。

8 スミス——イギリスの経済学者(一七二三—一七九〇)。

問

(A) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(B) 空欄 [a] [d] には、それぞれ微視的あるいは巨視的という言葉が入る。その組み合わせとして最も適当なものを、左記各項の中から一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | a | 微視的 | b | 巨視的 | c | 微視的 | d | 微視的 |
| 2 | a | 微視的 | b | 巨視的 | c | 巨視的 | d | 微視的 |
| 3 | a | 微視的 | b | 巨視的 | c | 巨視的 | d | 巨視的 |
| 4 | a | 巨視的 | b | 微視的 | c | 巨視的 | d | 微視的 |
| 5 | a | 巨視的 | b | 微視的 | c | 微視的 | d | 巨視的 |

(C) 線部(1)について。筆者は自身の自由論からこの「政治的スローガン」をどのようなものととらえ、それがいかなる帰結をもたらすと考えているか。句読点とも三十字以上四十字以内で記せ。

(D) 線部(2)について。これは具体的にはどのようなことか。左記各項の中から最も適切なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 「自分だけの部屋」を所有することができない所得の低い人たちが存在しているということ。
- 2 個々人が自分の権利のみを主張し好き勝手に行動しては、社会は成立しえないということ。
- 3 個々人の権利を制限しない限り、人々は自由の意味を認識できず社会は成立しえないということ。
- 4 社会が成立するためには、権威を持つ特定の個人とそれを支える個人の調和が必要になるということ。
- 5 社会が成立するためには、多くの人が集まることのできる共用空間が必要であるということ。

(E) 空欄 [①] ・ [②] のなかにそれぞれ漢字一字を補い、四字熟語を完成させよ。

(F) 左記各項のうち、本文の趣旨と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 個人の自由を可能にする条件を考えるならば、個人の自律と社会との関係について検討する必要がある。

- ロ 体系化された自由論は強制からの自由を意味するが、国王などの具体的個人の行使する権力は認められている。
- ハ 自由論の体系は抽象的な概念で構成されているため、個人の自由を否定する全体主義として解釈されうる。
- ニ ハロウエルの主張する「統合的自由主義」は、積極的自由と消極的自由の本質を統合したものである。
- ホ 「神の見えざる手」は、体系化された自由の認める超個人的原理の一つである。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

鬼(注1)一口の勢ひもなく、妖物(1)のやつしも叶かなはず、幽霊はそもいかなる者ぞ。その姿を写し絵にみれば、三角なる紙をいただき、広袖のゆかたに竹杖をつき、膝より下は描かくもあり、描かぬもあり。「ああら閻浮(注2)恋しや」と、子細らしきは雄おとこ幽霊なり。「まうしまうし」とよびかけたるは雌メ幽霊とするべし。多くは行脚(a)の僧に近寄りて布施なしの経を頼み、あるは剛なる侍を見かけて無心(3)をいふもたまたまなり。何の用もなきにあらはれて女わらべおどしたがるは、木(4)の葉幽霊のわざなるべし。そもや人死して幽霊の自由あらば、仏果(注3)を得ぬ亡者どもは、我も我もと立ちかへり来て、訪(5)ひ弔ひのあつらへは勿論にして、言(6)ひ残したる巾着のこまがね、隣の親(おや)仁(に)の無沙汰して居る取りかへ銭のことまでを告げて、妄執(6)の雲は払ふべきを、あだし野の露消えぬ日もなき世の中に、幽霊の至つてまねなるは、むさとはおこさぬあの世(b)の法度なるか。されば の盆会(はん)には、みそ萩(注4)・灯籠(とうろう)に座敷をかざり、土器(かわらけ)・麻木(注5)の膳立(ぜんだて)に、索麵(さうめん)・団子(だんご)の献立(けんりつ)を設けて、家々に招請(しょうせい)すれば、表門(せうもん)より手を引きつれて、はれやかに来たらむも、何(8)の遠慮(えんりょ)かあるべきに、その俤(おもかげ)も見及ばぬは、迎(むか)ひ火の馳走(ちそう)過ぎて、かかはゆしと思へるにや。⁽¹⁰⁾

踊(ま)ゆかたの伊達染の中へ、経かたびらを恥(は)づるにや。そもそも船岡(注7)・鳥辺野は幽霊の名所なれども、いづくに住居の穴もみえず、這(は)入り所を見た者もなし。しかれば、幽霊を出る出るといふは、世俗(注8)のとなへあやまりなり。出るといふは芝居の幽霊に限ることなりと、ある故実(注9)者の申しき。

① 笠もたで幽霊消ゆるしぐれかな

(「鶉衣」による)

(注) 1 鬼一口——「伊勢物語」などで、鬼は一口で人を食べるとされた。

2 閻浮——閻浮提の略で、須弥山の南にある国の名。転じて現世の意。

3 仏果——成仏という結果。

問

4 みそ萩——お盆の時、祖先の精霊しんりやうに供える草花。

5 麻木——麻の皮をはいだ茎。お盆の時、精霊の箸しやうとしたり、迎え火として門先で焚くもの。麻幹あさざら、苧殻おがらともいう。

6 膳立——膳を並べること。配膳。

7 船岡・鳥辺野——ともに京都の郊外で、葬地とされた。

8 故実者——有職故実に詳しい人。

(A) 線部(a)・(b)の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(B) 線部(1)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 飾り立てること 2 化かすこと 3 痩せること 4 くつろぐこと 5 姿を変えること

(C) 線部(2)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 気むずかしい 2 分別臭い 3 頼りなげな 4 未練がましい 5 事情ありげな

(D) 線部(3)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 たわごとをいう 2 金品をねだる 3 うそをつく 4 けちをつける 5 弱音を吐く

(E) 線部(4)と同じような意味の比喩に「木の葉」が用いられている最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 木の葉衣 2 木の葉返し 3 木の葉武者 4 木の葉時雨 5 木の葉髪

(F) 線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 精霊を接待供養する準備 2 精霊と遺族の交歓 3 精霊が戻って来る時の土産

4 精霊が戻って来る時の衣装 5 精霊が遺族を訪ねる約束

(G) ——線部(6)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 人の心は時とともに変わり、当てにならない。 2 人間の欲望は、命ある限り尽きない。

3 寿命には限りがあり、刻々と人は死んでいく。 4 人の栄枯盛衰は、流動してやまない。

5 この世の現象はすべて虚像で、実体はない。

(H) ——線部(7)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 わりやり 2 あっさりとは 3 たまには 4 やたらには 5 わざわざ

(I) 空欄□にはどのような言葉を補つたらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 初春 2 初夏 3 初秋 4 初冬

(J) ——線部(8)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 何の遠慮もないはずなのに 2 何も遠慮がないのだろうか

3 何らかの遠慮があるはずなのに 4 何か遠慮があるのだろうか

5 何か遠慮があるはずなので

(K) ——線部(9)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 よそよそしい 2 さむざむしい 3 そうぞうしい 4 むさくるしい 5 気恥ずかしい

(L) ——線部(10)の部分について、「経かたびら」のどのようなところを「恥づる」と見たのか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 贅沢過ぎるところ 2 時期はずれなところ 3 地味で不吉なところ

4 目立ち過ぎるところ 5 不謹慎なところ

(M) ——に含まれる助動詞「る」に「の」文法上の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 「る」は自発、「に」は完了
2 「る」は自発、「に」は断定
3 「る」は受身、「に」は完了
4 「る」は受身、「に」は断定
5 「る」は存続、「に」は完了
6 「る」は存続、「に」は断定

(N) 文末①の句の解釈・評として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 妄執を晴らしてあの世へ戻っていく幽霊を、さっと上がる「しぐれ」の降り方のように潔い、と賞賛した作。

2 煩惱に迷う人間は死後もみじめだ、と「しぐれ」の雨に濡れそぼつ幽霊の姿によって教えさとそうとした作。

3 盆会が過ぎて幽霊が姿を消すのは、笠がなくて、「しぐれ」に濡れるのがいやだからだ、と諧謔的に捉えた作。

4 雨露をしのぐ笠も棲家もなく、わずかな「しぐれ」にも退散する幽霊の侘びしさを、同情を込めて詠んだ作。

5 季節の推移を告げる「しぐれ」に驚き、あの世に帰っていく幽霊の狼狽した姿を、嘲笑気味に描き出した作。